



Osaka Gakuin University Repository

Title	チャールズ・ディケンズの慈善と文学 ―バーデット・クーツとのユレーニア・コテッジ共同運営をめぐる― Charles Dickens' Charity and Literature: Conflicts with Angela Burdett-Coutts over Urania Cottage
Author(s)	永岡 規伊子 (Kiiko Nagaoka)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 75 号 : 19-45
Issue Date	2018.6.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

チャールズ・ディケンズの慈善と文学 —バーデット・クーツとのユレーニア・ コテッジ共同運営をめぐって—

永 岡 規伊子

はじめに

「貧しい人たちの使徒 (Apostle of the Poor)」と呼ばれた作家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens: 1812-1870) と、「貧しい人たちの女王 (Queen for the Poor)」と称えられた慈善家アンジェラ・バーデット・クーツ (Angela Burdett-Coutts: 1814-1906) は、その与えられた称号通り、生涯を通じて貧民のための慈善活動に関わり続けた。¹ 二人で協働した事業も多く、その中でも、「堕ちた女の家 (Home for Fallen Women)」とディケンズが名づけた女性更生施設の運営に二人が直接携わり、長年に亘って心血を注いだことは、今ではよく知られている。

この通称「ユレーニア・コテッジ (Urania Cottage)」について、ディケンズは一度匿名の記事を雑誌に載せているが、それが二人によって設立・運営されていたことは当時の人々に知られることはなく、そのことを初めて明らかにしたのは、1920年代に公開されたディケンズからクーツに宛てた500通を越える手紙であった。² これらの雑誌記事とディケンズの手紙に記された詳細な会計報告やホームの理念と運営方針、そしてそこに生き生きと描かれている入所者の記録を用いて、「ユレーニア・コテッジ」について紹介する書誌が数多く出され、ディケンズとクーツの関わりについてもしばしば論じられてきた。³ とりわけ、ホーム計画当初から、建物の選定や備品の購入、入所者の受け入れと教育、出所後の移民先の斡旋、職員の採用やトラブルの処理に至るまで、ディケンズとクーツは詳細にやり取りを重ね、時には意見を闘わせながら運営

を行っていたことが手紙から明らかになっている。

ディケンズが作家・雑誌編集者として多忙を極めた時期に、これほどの労力と情熱をこの慈善事業に傾けたのはなぜか。よく指摘されるように、彼が観察したホームの入所者の振る舞いを小説に取り入れた例は『ディヴィッド・コッパフィーールド (*David Copperfield*)』のマーサの描写に見られる (Janes 17-18)。しかし、ホームで多くの「墮ちた女」をつぶさに見、彼女たちが過去に潜り抜けてきた辛酸を見聞きしながら、ディケンズはそれを直接小説のストーリーに取り入れることはなかった。彼はこの事業をごく一部の人にしか知られないように努め、ホームでの出来事の仔細をジャーナリズムや小説の素材にすることもなく、きわめてプライベートな領域で行っていた。また、匿名で事業を紹介した雑誌記事の中でも、成功例を報告するだけで、もっとも困難なケースについてはふれず、慈善事業において直面した課題は表面的には書かれることはなかった。

本稿では、スラム改良や貧民への教育を訴える記事の寄稿やスピーチ、あるいは慈善を目的とした朗読会など、いわばディケンズの本領である言葉による数々の慈善活動とは明らかに異なる、女性更生施設の現場での実践について考察する。とくに当時の「墮ちた女」に対する見方を代表していたと考えられるクーツとの対立から浮き彫りにされる、ディケンズの慈善観を明らかにし、その背景にあって彼の実践を支えたものは何か、そして彼にとっての文学と慈善の接点がどこにあったかについて考えたい。

1. 「墮ちた女」と社会的状況

「ユレーニア・コテッジ」でのディケンズの働きを検討する前に、「墮ちた女」に対する当時の見方と社会的状況について概観しておきたい。まず、その言葉が意味する範囲は、ディケンズの小説で見ると『オリヴァー・トゥイスト (*Oliver Twist*)』のナンシーや前述した『ディヴィッド・コッパフィーールド』のマーサなどの娼婦を指すことは言うまでもないが、19世紀の小説によく描

かれる未婚の母や男に弄ばれた女性もその範疇に含まれていた。たとえば、オリヴァーの母親や、『荒涼館 (*Bleak House*)』のレディ・デッドロック、『ディヴィッド・コッパーフィールド』のエミリも「墮ちた女」である。また、下層階級の女性が低賃金のお針子の仕事や工場労働によりやくありつけても、仕事を失い、あるいは病気になれば、たちまちワークハウスに収容されるか、売春や、盗みなどの犯罪に墮ちていく社会状況があった。当時新救貧法のもと、ワークハウスでは劣悪な処遇が続き、ディケンズ自身も小説を通してすでに世論を動かしていたが、1840年代にはワークハウスにおける救貧法学園 (*Workhouse School*) の設置も始まり、劣等処遇を補うべく民間の慈善事業施設が本格化してきた時期であった (*Higginbotham 194-200*)。⁴

周知のように、ヴィクトリア朝の社会において、女性は「家庭の天使」として娘か、妻か、母親であるべきというジェンダー観が支配し、性において自由が許されない存在であった。そのような規範の中で、娼婦は結婚という制度や家族の神聖さ、延いては道徳の秩序を脅かす「性の汚染者」とであると認識されていた。そのため、「売春は女性側の問題で、女性性が持つ礼節を汚すものと考えられ、娼婦さえいなくなればその問題は解決する」という、性のダブルスタンダードの存在が明らかな時代であった (*Bartley 30*)。

そのような当時のイギリスで、1850年代までには売春は「大きな社会悪 (*the Great Social Evil*)」と呼ばれ「社会の混乱を明白に映し出す記号として大衆の意識に根づいていた」 (*Walkowitz 32*)。⁵ 1843年に「シャツの歌 (“*The Song of the Shirt*”)” という詩でお針子の悲惨を訴えた詩人トマス・フッド (*Thomas Hood: 1799-1845*) が、1844年に「ため息の橋 (“*The Bridge of Sighs*”)” でウォータルー橋から身を投げた「墮ちた女」を題材に描いたことから、その問題に対して社会的な関心が高まった時期でもある。ディケンズもこの詩に触発されて『鐘の音 (*The Chimes*)』を書いたが、後にこの詩を主題としてジョン・エバレット・ミレー (*John Everett Millais: 1829-1896*) やポール・ギュスターヴ・ドレ (*Paul Gustave Doré: 1832-1883*) がエッチングを描

き、また1850年にはこの詩からインスピレーションを受けた G.F. ワット (George Frederic Watts: 1817-1904) による「溺死で発見されて (“Found Drowned”)」が描かれるなど、娼婦を社会秩序の破壊者として葬ってしまう社会への警鐘をいち早く鳴らしたのは、作家や画家であった。⁶

2. ホーム設立の経緯と設立理念

まさにそのような女性の貧困と売春が大きな社会問題として注目され、貧困に対してワークハウスの改革の課題も注目されてきた1840年代半ばのロンドンにあって、ディケンズとクーツが「墮ちた女」の救済に目を向けたのは自然な流れであっただろう。

まず、ディケンズのクーツに宛てた手紙からホーム設立の経緯をみておきたい。ホームについて初めて言及される1846年5月26日付の手紙では、後で詳しく述べるような設立理念と運営・教育方針が明らかに示されていて、この時点でディケンズによるホームの青写真がすでにできていたと言える。1847年5月23日にはロンドンの郊外シェパード・ブッシュ (Shepherds Bush) に、ホームに適した広さと立地条件を持つ庭付きの一戸建て住宅を見つけたことが伝えられ、1847年10月28日に刑務所の女性たちにホームへの入所を呼びかけるチラシの原稿が記されている。そして、1847年11月20日付の手紙では「今夜2人の少女が入所するとこれで4人になる」という記述が見られ、入所開始がこの頃であったことがわかる。そして、先に触れたように、1853年4月23日に、自らが編集する週刊誌『家庭の言葉 (*Household Words*)』に「家なき女の家 (“Home for Homeless Women”)」と題して、約5年間のホームの記録となる匿名の記事を発表している。⁷

それ以降、言及される頻度が少なくなるものの、ホームについて最後にふれている1857年7月20日まで、手紙で入所者や職員の様子が折々に克明に伝えられた。ディケンズのエレン・ターナン (Ellen Ternan) という女優との出会い、それに続く1858年の妻キャサリン (Catherine) との離婚によって、クーツ

と袂を分かつまで約10年間で二人の共同運営の期間と考えてよいだろう。クーツの秘書によると、ホームは1862年頃に閉じられ、足かけ15年ほどの間に150名の入所者がいたとされている。⁸

夜のロンドンの街に立ち、自分の屋敷の周りで客引きをする少女たちを見てクーツが心を痛め、彼女たちを救済する施設の設立を思い立ったとされるが、それを受けてディケンズはどのような施設を目指したのだろうか。

バートレイによると、当時存在した施設の「ペニテンシャリー (Penitentiary)」、「マグダレン・アサイラム、あるいはホスピタル (Magdalen Asylum/Hospital)」という名前は宗教的な意味合いを喚起し、売春婦に対する社会の見方を反映するものだったという。つまり、「Penitentiary」という更生施設を指す言葉は、もともとの意味としてキリスト教の罪、罰、悔い改めを表し、「Magdalen」もキリスト教の赦しを表象する言葉ではありながらも、この時代には「マグダラのマリアのように」天国に入る保証を得るには、過去の生活を悔いて、自分の罪の赦しを乞い、新たな出発をしなければならないという、むしろ懲罰の側面に重点が置かれていた (Bartley 31)。実際、1873年の国教会女性更生協会 (Church Penitentiary Association) 年次報告書には、「いわゆるペニテンシャリーの厳格で厳しい規律 (“the strict and severe system of a so-called Penitentiary,” *Penitentiary Work in the Church of England* 120) と記されている。⁹

ディケンズが当時見聞きしていた更生施設では罪人を扱うような処遇がなされ、しかも2年の収容期間が終わると行き先のないまま出て行かざるを得ずに元の道に戻るケースが多くあったという。手紙では、マーサ・ゴールドスミスという少女についてディケンズは以下のように述べている。それまで「マグダレン」に1年収容されていたが、施設側が新しい入所者を受け入れるために彼女に着替えと3シリングを与えて追い出したため、ホームに受け入れられることになった少女である。

公言すると大変なことになるでしょうが、「マグダレン」は愚かなことをやっています。この少女はそこに入って明らかに悪くなっているのです。彼女は再び世間に放り出されて、よくなる手段も持たず、もとの生活に墮ちるのではないかとひどくおびえています。(Jan.16,1848. *Letters*: 115)

マーサは、当時の実録に描かれた一人の少女に重なる。プロチェスカによると、更生施設で閉じ込められて髪を切られた一人の娼婦が、「常に自分の罪を思い知らされて耐えられなくなり」、再び街に立つようになったというエピソードが伝えられているのである (Prochaska 156)。

ディケンズはそのような当時の「墮ちた女」に対するスティグマから、何よりも本人自身が解放され、自尊心の芽生える場を備えることをホームの目標とした。彼はまず、クーツの新たな「アサイラム」建設の計画に対して、郊外の民家を改装して規模の小さい家庭的な施設にすることを提案し、呼び名も自らが思いついた「ホーム」とした。そして、少女たちへの教育が「宗教に基づく」ものでなければならないというクーツの意見に賛同しながらも、施設が「明るく希望に満ちたもので」、「自己否定を強いる単調な仕事に明け暮れるのではなく、自分の幸せな家庭にいるような、神の恵みのもとに過ごせるものでなくてはならない」と訴えた (May 26,1846. *Letters*: 80)。そして、当時の更生施設が「宗教的な言葉や決まり文句」で女性たちを過度に怖がらせ、それを二度と聞きたくないという先入観を持たせてしまっていることを理由に挙げて、入所時にホーム付の牧師が一人一人に説教をするというクーツの提案に反対した。その説教によって入所すら拒むのではないかとディケンズは懸念したのであった。彼女たちは「自分の墮落や罪深さは十分わかっている」のだから、「ホームでは彼女たちの過去について決して触れるべきではない」(Nov.3,1847. *Letters*: 101-102) というルールを徹底させた。

また、不幸な女性たちの多くは「自制さえできれば善良で落ち着きがあり、

病める者を優しく看護する思いやりがある」と彼は考えていた (May 26, 1846. *Letters*: 81)。そのため、「彼女たちを引きずり回したり、追い立てたり、おびえさせてはならない」と説く (Nov. 3, 1847. *Letters*: 103)。そして、「社会が冷たく扱い放り出したのだから、社会の道徳を重んずるよう期待するのは無理なこと」であると弁護し、彼女たちが「墮落したと言っても神から見放されたのではなく、この避難所で再び幸福になる手段を得て、自尊心を持って再起する」道を備えることを施設の使命として掲げた (May 26, 1846. *Letters*: 77-78)。

ディケンズは『オリヴァー・トゥイスト』の序文で人間の生来の「善がどんな劣悪な環境の中でも生き残るとい信念」 (*Oliver Twist*, lxii) を表明したが、その人間観はこの手紙にも見られ、彼自身の生育歴から育まれた社会の底辺に置かれた人々への共感がこの施設の理念と方針の根本にあったと言えるだろう。彼が生涯隠し続けた父の負債者監獄の体験は彼のアウトカーストの視点を得させたが、これは富裕な慈善家クーツの視点との根本的な違いであった。

3. ホームの運営・教育方針

そのような理念に基づいたホームの運営と教育方針は、時にはクーツと対立しながらも彼の「試み (experiment)」 (May 26, 1846. *Letters*: 78) として実践されていく。

まず運営は「経験を積んだ数人の紳士」からなる委員会が担い、「月に一度会計監査をし、監督の報告を受け、異常事態があれば調査し、入所者全員と個別に面談を行った」。実際に少女たちの監督と教育にあたるのは「明るく機敏で温和であると同時に堅実で用心深い」、住み込みで働く2人の女性職員であった (“Home for Homeless Women”: 170)。手紙から判断すると、この委員会はディケンズと彼の友人の刑務所長2人、そして牧師の合計4人で構成され、職員の採用や入所者の募集と受け入れは、委員会の面接を経て行われた。クーツが入所者と話をしたり、委員会に参加することはあったが、通常はディ

ケンズがホームの詳細を手紙に書いたり口頭で報告していたことが手紙から窺える。

入所者についてはもともと「少女」、「若い女」と呼ばれる年齢層の売春婦に限ることにしていたが、「刑務所に入れられたことがない少女」も混じることが「ホームの健全な運営に必要」(Jan.16,1848. *Letters*: 116)という判断から、後に「罪に堕ちた若い女性を希望が持てる境遇に戻すこと」、そして「罪に陥る危機にある若い女性を救い、犯罪から逃れる機会を与えること」という二つをホームの目標として掲げている(“Home for Homeless Women”: 169)。

そのため、雑誌記事に紹介された、最初の約5年間で入所した56人中8人の履歴は次のようなものであった。履歴の特徴や問題別に整理して以下に記しておく。¹⁰

まず、孤児として施設で育てられた経歴を持つのは次の例である。

- ・事例27：トゥーティング (Tooting) にある悪名高いドルーエ氏 (Mr. Drouet) の貧民の子どもの施設で育てられた孤児で、造花作りの徒弟に出たが、虐待を受けて逃げた後、古着を盗んで6ヶ月投獄された。ホームでの1年間は皆の評判が良く、移住先では快適な勤め先を得た。

次に貧困のために生活が困難となった例がある。

- ・事例13：餓死寸前の18歳の少女。父親の死後、針仕事で自身と病気の母親の糊口を凌いできたが、ワークハウスで母親が死んだ後、針仕事が少なくなり、食べ物も家もなくて知人の家からショールや聖書を盗んで売ったことから3ヶ月投獄された。1年余りホームで評判よく過ごした後、移住先で結婚した。
- ・事例58：針仕事では生活できず、飢餓に瀕した19歳の少女で、道を誤ったことはなかった。徐々に健康になり、申し分のない行状で、外国に行っ

て救われ、幸せに暮らしている。

また、父親に遺棄されるなどの虐待によって罪を犯すようになった例である。

・事例50：貧民学校 (Rugged School) から送られてきた19歳の少女で、小さい時に母親が死に、再婚した父親に家を追い出されて行く場所がなかった時に市長公邸近くの窓を割って侵入したため投獄されたことがあるが、他に悪いことをしたことはない。ホームに来た時は汚く不潔で髪を剃らなければならないほどで落ち込んだが、すぐに明るくなり、正直で誠実な性質が見られた。ホームで1年過ごし、最近海外移住し、雇い主に忠実で愛情深く仕える素直な使用人となっている。

・事例14：20歳の少女の母親が再婚した相手は大酒飲みで義理の娘を虐待した。彼女は婚約者に裏切られたことを恥として3年間家を出ていた。その間2回家に戻り、最初は6ヶ月、2度目は数日、ロンドン・ホスピタルにも入っていた。マグダレン・ホスピタルにいた頃、義理の父親が母親の葬式のために出てくるように仕向けて、以前のように虐待した。彼女は風紀を乱すとして刑務所に入れられた後、ホームに来た。彼女は健康を損ねており、ロンドンの暗黒街で不道德な経験をしてきたにもかかわらず、人を引きつける優雅な容姿を保っていた。ホームでの13ヶ月の間、不平も言わず、物静かに慎み深く過ごした彼女は速やかに回復した。移住先では、善良でよく働く、幸せな妻となっている。

・事例51：みずぼらしい身なりの少女は16歳か17歳と自分で言っているが、もっと幼く見える。彼女は二人の年長の浮浪者と一緒に救済を断られてワークハウスの入り口で騒動を引き起こしたことから警察に引き渡された。彼女が10～11歳の頃、絞首台の組み立てで師であった父親に捨てられたが、父親とはロンドン橋ではぐれたという話を彼女は信じていた。ホップ摘みなどをして長らく田舎を放浪していたので、靴を履くことに慣れて

おらず、ベッドで眠った事もほとんどなかった。彼女はホームに受け入れられた。慎み深く、几帳面で有能な少女は、誰からも文句のつけようもなく、与えられたすべてのことを熱心に学んだ。1年も経たないうちに彼女はオーストラリア行きの船に乗りこんだが、別れを悲しんで監督の首にしがみつく姿は居合わせた人々の涙をさそった。

そして、親が再婚後に不良行為に陥った例も示されている。

・事例41：母親が再婚後、洋服屋に徒弟に出たが、若者と一緒にサーカスに行き、門限までに帰らなかったために家から閉め出され、当然の結果として弁解のできない振る舞いに及んだ。病院での治療期間を含んでホームには1年半以上留まった。外国に行ってから、申し分のない評判を得て、熱心に働き今では幸せになり感謝に満ちている。

・事例54：22歳の若い女性は自殺を図った罪で刑務所に入っていた。彼女が2歳になる前に母親が死に父親は再婚する。旅行に付き添う女中としてロシアに行った時に知り合った賭博ブローカーと一緒に夜遅くまでいたことを恥として、父親を恐れて家に帰らなかったところから道を誤った。墮落と困窮の果てに、「2シリング分のアーモンドオイル」を飲んでしまうが、病院で手当を受けた後、刑務所に収容された。ホームでは、彼女がそれまでで一番優秀な入所者であることを証明し、7ヶ月後、海外に移住した。家を出てから会ったことがなかった父親が彼女に会うためにホームに来て、彼女の話が本当であることを確証した。ホームが行った治療以外にこの少女を回復させる手立てがあったかどうかは疑わしい。

(“Home for Homeless Women” : 173-5)

クーツに宛てたディケンズの手紙には、後に挙げるようにホームで問題を起こした少女たちの難しい事例も伝えられているが、雑誌に取り上げられたのは

以上のように道徳的に認められているケースばかりで、ホームを経た後に更生を果たした成功例に限られている。また、これらの少女の多くが、貧民学校やワークハウス、マグダレン・アサイラムなど施設を経てホームに受け入れられており、中でも1,400人中180人という多くのコレラによる死者を出したドルーエ氏の施設 (Mr.Drouet Establishment for Pauper Children, Tooting) から少女を受け入れていることは注目される。ディケンズは同時期、匿名で *Examiner* 誌に “The Paradise at Tooting” (Jan.20,1849) と題してその個人経営の劣悪な救貧法学園を批判しているからである。¹¹ ディケンズはユレーニア・コテッジの衛生面に気を配り、上下水工事の陳情に足を運んでいるが (Sep.13, 1850. *Letters*: 177)、「清潔と健康」 (“Home for Homeless Women”: 173) の保持もホームの重要な運営方針であった。

ホームでは朝の祈り、聖書朗読、夕べの祈りを軸にして朝6時から夜9時までの日課が決められており、施設を出た後に必要となる読み書きや、洗濯、パン作り、掃除、針仕事などの家事が二人の監督によって教えられた。その合間には1日4回の娯楽の時間 (午後の授業と夕食の間・お茶の前には30分間、夕食後とお茶の後には1時間) が与えられていて、友達に贈る小物作りや花壇の手入れ、また針仕事をしながら「注意深く選ばれてはいるが面白い」本の朗読を聞くこともあった。ディケンズの手紙によると、職員がワーズワース (William Wordsworth: 1770-1850) やジョージ・クラブ (George Crabbe: 1754-1832) の詩をホームの読書リストに入れることを提案しており、子供向けの読み物も置かれていた (Sep.6,1850. *Letters*: 175-6)。また専門の講師を雇うほどディケンズが力を入れた音楽の時間には「グループで歌を歌う楽しみ」があり、中古のピアノを備える理由として、「皆が寝る前にピアノを囲んで賛美歌を歌っているのを聞いたら、新しい入所者の心がどんなに和らげられることか」とディケンズは述べている (Nov.3, 1847. *Letters*: 107)。このように、ホームでの生活は、宗教教育と単純労働で明け暮れる他の施設の日課とは異なり、「墮ちた女」がこれまで得られなかった暖かい家庭的な環境の中での心の

教育を第一に考えたものであったことがわかる。

また、ディケンズは家全体を明るい色調にするだけでなく、入所者の服装の色にもこだわった。届いた服地の色が陰気すぎるという理由で返品する事もあったという。さらに、更生施設ではグレーなどの地味な制服だった時代に、教会などへ外出する時に施設の入所者とわからないようにするため、色違いの服を準備するというディケンズの気遣いは画期的なことだったに違いない。¹² 貧民学校の子どもがその制服を目印にいじめを受ける時代でもあり、ユレーニア・コテッジが更生施設であることが知られて、入所者が近隣の人々の視線に傷つくことがないようにという配慮だった。しかし、服装の色に関するディケンズの意見は、後で述べるようにクーツと対立する点の一つとなっていく。

そして、教育方針について、クーツの反対を押し切って取り入れたのが「マコナキー大佐の評価システム (Captain Macconnochie's Mark System)」である。それはもともと刑務所で受刑者の態度を評価する採点システムとして考案され、ディケンズが修正してホームの入所者の教育に用いたもので、身につけるべき9つの項目に照らして日々の自らの行いを内省し、更生に繋げようとする試みであった。それは誠実さ、勤勉さ、落ち着き、行動や会話の礼儀正しさ、穏健さと忍耐力、整理整頓、時間厳守、儉約、清潔さで、これらの項目それぞれについて自己採点をして記録し、毎日の合計得点は蓄積されお金に換算された。それによって入所者が1年間で得る収入は、庶民階級の女性使用人の平均給料とほぼ同じになり、将来海外移住したときの生活資金にするために蓄えられた。これによって自分の将来につながる克己を奨励し、自己管理能力を養うことで、真の意味での更生を促す教育を模索していたことがうかがえる。それは後にも述べるように、クーツの教育観と異なるものであった。

そのような教育の下で入所者を約1年間収容した後、オーストラリアや南アフリカなどに移住させることがホームの最終目標であった。移住先ではホームでの家事の訓練を生かして家政婦として働き、現地での結婚を奨励するディケンズの考えは、必ずしも結婚しなくてよいというクーツの考えと異なっていたはい

だが、「墮ちた女」の新たな天地を海外移住に求める方針において二人は一致していた。海外移住の推奨は、貧困と犯罪の問題の解決や植民地拡大の観点から当時の大英帝国の政策に合致したものであり、子ども移民が「流刑から救貧へと、そのレトリックをはっきりと変えた」(井野瀬 279)という19世紀半ばの社会的な思潮に沿う方策であった。

4. ユレーニア・コテッジの活動の先駆性と成果

ディケンズの試みた方法は、それまで行われてきた「ペニテンシヤリー・システム (Penitentiary System)」という懲罰的な施設運営を廃し、少人数の家庭的な環境のもとで自発的な更生を促すものであった。注目すべきはその方法が、シャフツベリー卿の資金提供によって1850年に設立された「ロンドン女性寮 (London Female Dormitory)」で初めて採用されたとされる「ファミリー・ホーム・システム (Family Home System)」に繋がっていくのではないかと考えられる点である。この影響関係についてはさらに当時の資料にもとづいて検討する必要があるが、少なくともその施設よりも数年先んじて開設されたディケンズのホームが当時の先駆的な取り組みの一つであったことは評価すべきだろう。収容される年齢層は違うものの、1873年になって初めて、バーナード・ホーム (Barnardo's Home) が小舎制を採用し、家庭という場での孤児の養育の正当性と有効性が証明されることになるのである。¹³

ディケンズは当初、ホームの成果目標を次のように掲げていた。

この試みがどのくらいの割合で成功するのか、予想するのは難しいです。けれども、よく考えられたシステムでうまく運営されたら、最初から半分の成功は見込めるでしょう。時が経てばその割合はもっと大きくなるでしょう。これが妥当な予想だと思います。(May 26, 1846. *Letters*: 81-82)

この予想に対する5年後の成果をディケンズは匿名の記事の中で次のように

記している。

56名の入所者のうち、7人が自分の意思で去り、10人が追放され、7名が逃げ出し、3人が移民船の中で再び娼婦になった。そして、30人がオーストラリアなどに到着して仕事を得た（そのうち7人が結婚）。(“Home for Homeless Women”: 169)

事業の中間報告とも言えるこの記事では、先に引用したような成功例を紹介しながら、56人中30人が海外移住を果たしたと伝えている。この数字は、最初に目標として設定していた2分の1に達するものであり、この時点でのディケンズの「試み」は一定の成果を上げたと言えるだろう。しかし、それ以降、彼は事業の成果について公にすることも、手紙でふれることもなく、当初の成果目標に記されていた「時が経てばもっと成功率が上がる」という予測の結果を見ることのないままホームは閉じられることになる。

また、この記事には載せられなかったが、クーツに宛てた手紙で言及されている失敗例は、以下に要約するように更生が難しい深刻なケースであった。

・イザベラ・ゴードン：ハナ・マイヤーズと共謀して入所者全員がホームのスタッフに敵対するように仕向けた。その行為がホームを混乱に陥れたため追放された。(Nov.6, 1849. *Letters*: 152)

・ハナ・マイヤーズ：重罪を犯してミドルセックスの治安判事裁判所に出廷した。トレイシー刑務所での12か月の懲役が言い渡された。(Nov.6, 1849. *Letters*: 152)

・セシーナ・ポラード：イザベラ・ゴードン事件で、ホームの入所者をスタッフに敵対させようとした時に関わった三人目の人物で、ディケンズは、彼女が「この町で一番の嘘つきのあばずれで、悪に染まった界限でもあれほど汚れた女はいない」、「2週間で女子修道院を墮落させてしまうだ

ろう」と断じている。(Nov.6, 1849. *Letters*: 153-154)

・ジェミマ・ヒスコック：貯蔵庫をこじ開けてビールを飲んだ上に、誰かが「壁から投げ入れた強い酒」を飲んだらしく、泥酔し「聞くに堪えない言葉」を使い追放された。メアリ・ジョインズと他の女性も飲酒に誘い込んだ (April 6, 1850. *Letters*: 169-170)。

・スタリオン（ファーストネームは記載されていない）：凶暴性を発揮し始めたため、素行を良くしなければ1か月マークを与えないと警告した後、ホームの人間に深刻な被害を与えかねないとして追放された (Nov.6, 1852. *Letters*: 214)。

・フランシス・克蘭ストン：更生しようと努力している人に対して、他の入所者が反感を抱くように仕向け、監督の評によると「他人をトラブルに巻き込んでおいて自分は無関係—ほんの少しだけ外側にいる—という立場にしておく狡賢さがあり、誰も彼女を捕まえることはできない」少女であった。ディケンズが彼女に10日以内に態度を改めなければ退所させるように委員会に提案すると告げた夜に騒動を起こしたことから、翌朝退所となった (April 16, 1854. *Letters*: 261-262)。

ディケンズは克蘭ストンの事件のあと、「断固とした態度を取るという本当の愛情」の必要性に気づき、「彼女をもっと早くに放逐していればエリザ・ウィルキンを助けることができただろうに」と述べ、失敗率の予測はしていたものの、この事業を通してどんな環境に置いても改心が望めない難しいケースに立ち合い、現実を知ることになったのも事実である。これは生来の善を信頼し、どんな人間でも改心が可能とする、ディケンズの持っていた慈善観に修正を迫る出来事であったに違いない。

5. ディケンズ文学への影響

ディケンズは作家として、ホームを実際に運営しながらの10年あまりの間

に後期の長編小説6作を残している。はじめに述べたように、小説の中に、ディケンズの記憶に残ったホームでの情景が挿入されることはあっても、ユレーニア・コテッジの入所者個々の人生を小説のストーリーに取り入れることはなかった。また、ディケンズが多く手がけた文学のジャンルであるルポルタージュの1つとして、“Home for Homeless Women”と題してこの施設を匿名で紹介することはあっても、そこでもクーツに宛てた私的な手紙に記したようなエピソードを描くことはなかった。これは、「墮ちた女」たちが社会の劣悪なシステムの被害者であるという慈善観と、受け入れた入所者たちを世間から守るという彼の強い倫理観の表われであるのは疑いがない。そのことから、ディケンズの慈善事業は作家の視点とは明らかに切り離れた領域で行われたと言える。

しかし、結果的には、ユレーニア・コテッジの運営は彼の作家としての人間理解を深める機会であったことは確かである。後期作品以降の人物描写に奥行きが加わり、人間の心の闇や社会の闇がより濃く描かれるようになるのは周知の通りである。これは、もちろん他の幅広い交友関係やアメリカ旅行、大陸旅行、そしてロンドン探索の体験が影響を与えたものだが、ホームの多様な人間模様の観察はディケンズに作家として最も大きな転機をもたらせたのではないだろうか。また、それは同時にその後の慈善講演やペンによる慈善活動にも大きな影響を与えていったと言えるだろう。

6. ディケンズとクーツの対立の背景にあるもの

さて、これまでディケンズの側に立ったホームの経営と意義について述べてきた。しかし、共同経営者で資金提供をしていたクーツの考えは随所にあっただけであり、それと調整をしながらの10年あまりの事業運営であった。クーツがホームについてどのような考えを持っていたかは、彼女からの手紙が後にディケンズによって焼却処分されたために明らかになっていない。しかし、ディケンズの手紙の端々からクーツの意見を推し量ることは可能で、やがて

ホームの閉鎖をもたらすことになると考えられる二人の見解の違いを探ることができる。

まずホーム構想の段階でディケンズがクーツのプランに反対したのは、先に述べたように、従来の「アサイラム」を新しく建てること、入所時に牧師による説教を聞かせることであり、反対にクーツがディケンズのプランに反対したのは入所者に用意する明るい色の服装と、マコナキー大佐の評価システムによる生活訓練の方法であった。

さらに、ホームの運営においても二人が対立する場面があった。多くの女性は住み込んで働くことを怖がって、職員を見つけにくいことを危惧していたディケンズは、ようやくフィッシャー夫人 (Mrs. Fisher) という27歳の未亡人をホームにふさわしい副監督として採用する。物腰のやわらかな女性で、このプロジェクトに関心を持ち、若い人々を教えることに慣れていた彼女にディケンズは大きな信頼を寄せていた。しかし、その1ヶ月後の手紙で、彼女が非国教徒であることを採用の時に言わなかったという理由でクーツが解雇したことにディケンズは反発する。彼女の教派をクーツに伝えていたのは確かで、そのような理由でフィッシャー夫人を辞めさせるのは遺憾であり、彼女の傍らで棚に片付けられていた学習用の本を少女たちが熱中して読んでいるのを一度見てほしい、と強く訴えるのである (Dec.20 & 29, 1847. *Letters*: 110)。

クーツがそれでも強硬にディケンズに反対した理由は明らかにされていないが、その件がホームの教育方針にかかわる副監督の採用であったことを考えると、国教徒でないという教派の問題だけでなく、クーツ自身の持つ慈善観や教育観との葛藤があったのではないだろうか。彼女が目指したのは、従来の国教会による「アサイラム」が行っていた宗教的な回心 (conversion) による救済であり、ディケンズの道徳的な改心 (reform) と人格的な回復の道筋とは相いれないものであったと思われるのである。

クーツの女性の慈善と教育についての考え方を知る手がかりとなるのは、彼女が編集・執筆した『女性の使命 (*Women's Mission*)』である。これは、シカ

ゴ万国博覧会で初めてできた女性館に出展されたもので、クーツが序文と2つの章を担当執筆し、ナイチンゲールも含む、慈善事業の様々な分野で活躍する女性の働きを33項目に亘ってレポートしている。ここでクーツは女性の役割について進歩的な考えを示しているように見えるが、カナーは、それを革新的で急進的な考えや態度と考えるのは間違いで、女性が博愛事業や教育の仕事をする動機を「慈愛」と「女性の美德」として、理想化させたと述べている (Kanner 58)。

実際、ヴィクトリア朝における女性の慈善について、家庭の天使であるべき「淑女は職業に就かないものである」という理想が広くゆきわたった時代において、「賃金を伴う労働には従事しないように期待されていた」が、唯一「貧者への無償の慈善活動は女性の『義務』の一つ」として容認されていたという (パーヴィス 8-9)。クーツは当時のドメスティック・イデオロギーの枠組みからはずれることなく、上流階級の女性であっても受け継いだ富で慈善事業を行うことができたのであり、中産階級の女性たちの博愛運動を支援することができたと考えられるだろう。

ここで、クーツがハナ・モア (Hannah More: 1745-1833) の福音主義的な女性教育を擁護する立場だった、とするカナーの論は注目に値する。¹⁴ ハナ・モアが提唱した日曜学校や慈善学校での労働者階級への教育は、聖書と宗教冊子を読ませて宗教的感情を持たせ、「勤勉と信心の習慣」を植え付ける目的を持っていた。そしてカナーは以下のように述べている。

クーツは、モアと同様、宗教的な訓練は教育課程に必要不可欠なものだと主張した。(中略) 彼女はハナ・モアのように国教会の福音主義と正式につながっているわけではなかったが、キリスト者の「善良さ」、「秩序」、「慈善」を重んじる彼女の信仰と、女性としての自分自身のミッションを内省して深く考える姿勢を考えると、彼女を「福音主義」と呼んでよい。(Kanner 99-100)

さらに、クーツが福音主義の影響下にあったことは、先に述べた服装の色合いについての二人の対立にも見ることができる。ヒーリーはクーツの伝記の中で、「クーツが明るい色を好むディケンズに困惑したのは初めてではなかった」と述べ、その理由を「クーツは自分が美しい服に喜びを感じることにある種の罪悪感を持っていた」からだという。そして、

彼女が押さえようと苦勞していたのは自分の女性らしさであった。色についての意見の違いは深い意味を持っていた。クーツは、それを軽率さには近づかないという、義務感によって固められた強固な意志と呼んだが、ディケンズはその義務感とそれを壊したいという欲望に引き裂かれていた。ディケンズとクーツの気持ちに隔たりができはじめていた。(Healy 133-134)

ディケンズがホームの入所者のために注文した「明るい色」の服は、クーツには受け入れがたいものだったのだろう。ヒーリーが述べるように、クーツにとって明るい色は軽率さに繋がり、それを禁じて自らを抑制することの美德に価値を置いていた。当時の優勢な精神風土としてイギリス社会を覆っていた、このような福音主義の教えに依って立つクーツと、それを打ち破ろうとするディケンズのせめぎ合いが、ホームの運営の対立に表われていたと言えるだろう。

もちろん、ポープが指摘するように、ほとんどのヴィクトリア朝の人々と同様、ディケンズが福音主義から受けた影響は大きく、慈善と善意がキリスト教信仰の本質であるという信念は福音主義のものもであった(Pope 1)。しかし、道徳的な真面目さに偏り、「ペニテンシャリー」「マグダレン」という名前が示すような、懲罰によって墮落からの救済を試みようとする福音主義者による慈善事業にディケンズは反対した。

彼がユレーニア・コテッジの前段階として、1842年にボストン・ユニテリ

アンの牧師ウィリアム・エラリー・チャニング (William Ellery Channing: 1780-1842) と出会い、帰国してからロンドンのユニテリアン派の教会 (Little Portland Street Chapel) に席を移したこと、その後国教会に戻ってからもエドワード・タガート牧師 (Rev. Edward Tagart: 1804-1858) との交流があり、またディケンズが自分の子どものために書いた聖書『救い主イエスの生涯 (*The Life of Our Lord*): 1846』にユニテリアンの影響がみられることなど、ディケンズのキリスト教信仰を知る上で重要な出来事があった。激動の時代にあつて、キリスト教の理解そのものが幾重にも分かれ、教派で割り切れない流れとなるなかで、ディケンズは狭い教義に囚われず、社会的な視野や拡がりを持った宗派や運動に身を置いていったのではないかと考える。¹⁵ その中で彼はユニテリアンが「人間の向上に何かをなし、慈善と寛容を実践してくれる」¹⁶ と期待して彼らの教会に加わったと友人への手紙に書いているように、自国の福音主義者に足りないと感じたものが「寛容」であったのだろう。

まとめ

1840年代は売春や非行は罪の対象か、それとも更生が可能なものかという議論が高まった時期であった。「ユレーニア・コテッジ」は、以上見てきたように、主宰者二人の慈善観と教育観の違いによる葛藤を抱えながら、それを乗り越えて「墮落した女」の救済という一つの目標に向かったのは、クーツがディケンズとの共同作業によって、あるいは社会の流れに沿って、国教会の処罰の対象という古い考え方から、寛容な慈善を受け入れる用意があつたことを示していると言えるだろう。クーツはその後、救貧法委員会に反対して「ワークハウス内の大人の収容室から15-25歳の若い女性を分離した施設内に入れ、洗濯、アイロンかけ、料理、針仕事、衣服作りなどの家事労働を教え、就労の道を開く」ために、ルーザー・トワイニングが主導する「ワークハウス訪問協会 (Workhouse Visiting Society)」の6人の小委員会の一人に加わっている (吉尾 258-269)。この働きは明らかに、ユレーニア・コテッジでの職業訓練を

思い起こさせるものである。しかし、先にふれたように、1857年のディケンズの離婚を機にクーツとの交流が途絶え、ホームは事実上クーツの秘書の運営に任されるようになった。離婚が国教会の教えとして許されないこと以上に、エレン・ターナンという、自分の長女と同年齢の娘を愛人とすることで「堕ちた女」を一人増やす結果となったディケンズの行為は、性のダブルスタンダードの社会であったとは言え、クーツと袂を分かつ大きな要因だったのではないか。それは、ヒーリーの言葉を引いたように、服装の色についてまでも自己を抑制する「義務感によって固められた強固な意志」を貫くクーツと、時代を覆った「義務感を壊したいという欲望」に突き進んだディケンズとの決別であったと言える。

クーツとの共同運営によるユレーニア・コテッジの実践の場を経ることによってディケンズの間観は深められた。それはその後の作品内容に大きく影響を与えていると考えられるが、個々の作品への影響については改めて述べてい。

*本稿は、日本キリスト教文学会関西支部冬季大会（2017年1月28日、関西学院大学）で「チャールズ・ディケンズの慈善活動とキリスト教」と題して口頭発表した内容を加筆・修正したものである。

注

1. ディケンズの息子ヘンリーの回想記で、「父は真に優れた、民衆のための作家」で、「貧しい人たちの使徒 (Apostle of the Poor)」と呼ばれていたと書いている。(Henry Dickens, 40-41.)

また、アンジェラ・バーデット・クーツは当時最大のクーツ銀行を所有する母方の祖父から莫大な資産を若くして遺贈され、イギリス一の裕福な女性と言われていた人物である。リベラルな国会議員であった父から、社会的な活動の視点を受け継いだバーデット・クーツは、その資産を慈善事

業に充てることを使命とし、ロンドンのスラム改善や貧民のための住宅建設をはじめとして、英国動物虐待防止協会に関わり、リビングストンのアフリカ探検を支援するなど多種多様な活動を行った。彼女はそれらの活動に対してヴィクトリア女王からバロネスという爵位を授けられ、人々からは「貧しい人たちの女王」と呼ばれ、葬儀にはあらゆる階層から2万人の参列者が集まったと伝えられている。自らの働きを世間に多く知らせることはなく、「知られざる貴婦人」とも呼ばれている。

なお、遺産相続の条件に添って名字に母方の *Coutts* を付け加え、バーデット・クーツと名乗り、正式にはバロネス・アンジェラ・バーデット・クーツではあるが、後に自らクーツと名乗るということもあり、通常ミス・クーツと呼ばれているが、本稿ではクーツと呼ぶ。

- クーツに宛てた手紙は *Pilgrim* 版に載せられているが、本稿では、エドガー・ジョンソン編を用い、引用は本文中に（手紙の年月日 *Letters: 頁*）を記すこととする。
- クーツとディケンズの関係については、参考文献に挙げたクーツの伝記とエドガー・ジョンソン編の手紙でふれられており、セルマ・カナーとジェニー・ハートレーが詳しく論じている。
- 1860年代末には公的な *COS*(*Charity Organization Society*) が組織されることになるが、ユレーニア・コテッジは民間の慈善事業施設が本格化する頃の社会的な流れに位置づけられると思われる。
- さらに、1873年の国教会女性更生協会 (*CPA: Church Penitentiary Association*) の年次報告書で、「売春は社会の破滅を招くもの *'ruinous to society'*」と言われるほど売春は大きな社会問題となって、性病に関するさまざまな法律が制定された。(*Penitentiary Work in the Church of England, vi*)
- これについて平林は、「ヴィクトリア朝文学では溺死が社会秩序の破壊者である『墮落した女』や『娼婦』の行き着く運命であった。『溺れ死ぬ』

ことは魔女の汚名から逃れることだった。19世紀の娼婦も『溺死』することによって哀れみを受け、家父長制社会の秩序も回復するのである。女の溺死の図像はヴィクトリア朝男性性の矛盾した考えを表現するものである」と解釈している（平林美都子「ヴィクトリア朝絵画における男性性」『愛知淑徳大学論集—文化創造学部』第3号, 2003: 35）。

7. Charles Dickens, “Home for Homeless Women.” *Household Words* 23, April 1853: 169-175. ここからの引用は本文中に (“Home for Homeless Women”: 頁) を記す。
8. 1861年国勢調査によるユレーニア・コテッジの住人として、3人の職員（監督、副監督、家政婦）と10名の入所者の名前が記されている。（Pamela Janes, 1992.）
9. イギリスで最初の娼婦の更生施設として1758年にロンドン・ホワイトチャペルに建てられたのが「マグダレン・アサイラム」であったが、この年次報告書に1853年から21年間の記録があり、1853年に4カ所（92人収容）、1873年に31カ所（829人収容）と記載されている。（*Penitentiary Work in the Church of England* 15）
10. なお事例番号はディケンズが振ったもので、雑誌記事の中でも順不同となっている。
11. <http://www.workhouses.org.uk/Drouet/Examiner1.shtml>
12. 1761年のマグダレン・ホスピタルの制服について、「全体が質素で小ざっぱりした明るいグレー、あるいはグレーがかった茶色」と書かれている。（Cunnington 1978: 171）
13. 現在の名称は“Barnardo’s”で、1866年に Dr. Thomas John Barnardo が設立した。
14. 教師、作家、慈善事業家であったハナ・モアはウィリアム・ウィルバーフォース主教の影響をうけて、宗教的な主義や教義による女子教育の冊子を多数書き、フェミニズムの先駆者であるメアリ・ウルストンクラフトと

対極の立場にいる女性である。

なお、ここでの福音主義の概念はヤングとアシュトンの以下の定義に従う。「18世紀の終わりから19世紀の中頃まで英国国教会のもっとも活動的なメンバーであった福音主義者がイギリス社会の道德観を変え、ヴィクトリア時代に道徳的な真面目さという特徴を与えた。福音主義は宗教的な態度であると同時に生活態度も意味しており、上流・中流階級の人々が下層階級の人々に対して道徳的な行いの模範となり、厳格で禁欲的で敬虔な生活の手本となるように期待された。そして、彼らから慈善を受けた貧しい人々には同じように厳格な振る舞いを要求した (Young & Ashton 28-9)。」

15. 拙稿「ヴィクトリア朝期イギリスの宗教と文学—ディケンズ文学におけるキリスト教 (シンポジウム「宗教と文学の対話」報告)」(『キリスト教文学研究 第31号』日本キリスト教文学会、2014: 52-62) において詳しく述べた。
16. To C.C.Felton, 2 Mar 1843, *Pilgrim Letters*, Vol.3: 455-456.

参考文献

1. Anonymous. *Baroness Burdett-Coutts: A Sketch of her Public Life and Work Prepared for the Lady Managers of the World's Columbian Exposition by Command of Her Royal Highness, Princess Mary Adelaide, Duchess of Teck*, London: Unwin Brothers, 1893. Digitally printed version: Cambridge UP, 2013.
2. Bartley, Paul. *Prostitution: Prevention and Reform in England, 1860-1914*, Routledge, 2000.
3. Burdett-Coutts, Angela. ed. *Woman's Mission; A Series of Congress Papers on the Philanthropic Work of Women, by Eminent Writers*, New York and London, 1893. 2013年に Cambridge Library Collection として復刻され、また次の URL に全文公開されている。

<https://archive.org/details/womansmissionser00burdiala>

4. Church Penitentiary Association ed., *Penitentiary Work in the Church of England*, (Classic Reprint Series) FB & C Ltd., 2015.
5. Collins, Philip. “The Home for Homeless Women.” *Dickens and Crime*, Macmillan, 1965.
6. Cunnington, Phillis. & Catherine Lucas, *Charity Costumes*, Adam & Charles Black, 1987.
7. Dickens, Charles. “Home for Homeless Women.” *Household Words*. 23 April 1853: 169-175.
8. Dickens, Charles. *Bleak House*, Oxford,
9. Dickens, Charles. *David Copperfield*, Oxford,
10. Dickens, Charles. *Oliver Twist*, Clarendon, 1997.
11. Dickens, Charles. *The Life of Our Lord: Written Expressly for his Children by Charles Dickens*, The Westminster Press, 1981. (Reprint of the 1934 ed. Published by Associated Newspapers, London)
12. Dickens, Henry. *The Recollections of Sir Henry Dickens*, K.C., London: William Heinemann LTD, 1934.
13. Gordon, Peter. and David Doughan, *Dictionary of British Women's Organizations: 1825-1960*, Routledge, 2002.
14. Hartley, Jenny. *Charles Dickens and the House of Fallen Women*, London: Methuen, 2008.
15. Healey, Edna. *Lady Unknown: The Life of Angela Burdett-Coutts*, London: Sidgwick and Jackson, 1978.
16. Higginbotham, Peter. *Children's Homes: A History of Institutional Care for Britain's Young*, Pen & Sword History, 2017.
17. Janes, Pamela. *Shepherd's Bush: The Dickens Connection*, published by the Shepherd's Bush Local History Society, 1992.

18. Johnson, Edgar. *Letters from Charles Dickens to Angela Burdett-Coutts: 1841-1865*, Jonathan Cape, 1953.
19. Kanner, Selma Barbara. "Victorian Institutional Patronage: Angela Burdett-Coutts, Charles Dickens and Urania Cottage Reformatory for Women." UCLA 1972 (unpublished PhD thesis).
20. Orton, Diana. *Made of Gold: A Biography of Angela Burdett Coutts*, London: Hamish Hamilton, 1980.
21. Owen, David. *English Philanthropy: 1660-1960*, Harvard UP, 1964.
22. Patterson, Clara Burdett. *Angela Burdett-Coutts and the Victorians*, London: John Murray, 1953.
23. Pilgrim Edition, *The Letters of Charles Dickens, Vols. 1-12*, Clarendon, 1965-2002.
24. Pope, Norris. *Dickens and Charity*, Macmillan, 1978.
25. Prochaska, Frank. *Women and Philanthropy in 19th Century England*, Clarendon, 1980.
26. Walkowitz, Judith R. *Prostitution and Victorian Society: Women, Class, and the State*, Cambridge UP, 1980.
27. Young, A. F. and E. T. Ashton, *British Social Work in the Nineteenth Century*, Greenwood Press, 1956.
28. 井野瀬久美恵「ヴィクトリア朝フィランソロピーの陥穽——子ども移民のレトリックを中心に」『英語青年』141巻6号、研究社、1995年、278-282.
29. パーヴィス、ジェーン、香川せつ子訳『ヴィクトリア時代の女性と教育—社会階級とジェンダー』ミネルヴァ書房、1997.
30. 吉尾清『社会保障の原点を求めて—イギリス救貧法・貧民問題（18世紀末～19世紀半頃）の研究』関西学院大学出版局、2008.

Charles Dickens' Charity and Literature: Conflicts with Angela Burdett-Coutts over Urania Cottage

Kiiko Nagaoka

As Charles Dickens was called “Apostle of the Poor,” and Angela Burdett-Coutts was hailed as “Queen for the Poor,” they worked for charity in various ways all through their lives. Among their joint charity works, the “Home for Fallen Women,” otherwise known as “Urania Cottage,” is considered unique in the sense that they were both closely involved in the project right from the start. After getting Burdett-Coutts' agreement, Dickens actually planned and managed every detail of the home's establishment. It was quite different from Dickens' other charitable activities using his pen such as writing articles and making speeches for the poor and against social injustice.

In this paper I will consider how the experience with the “Home for Fallen Women” influenced Dickens' ideas about charity and deepened his view of human beings. In addition, I will discuss the conflicts between Dickens and Burdett-Coutts over the management of “Urania Cottage.” I will conclude that the underlying cause of their conflicts was the difference of their views of education and religion.